

優良賞 題名 やさしき

涌谷中学校 三年 後藤 悠希

あの日、何故か朝早く起きた。父が出勤する時間だった。

「地震雲がでてたから気をつけなさいよ。」

そう一言だけはなち、いつものように家をでていった。いつもとは何かが違く感じた。そして父に会いたくなかった。

いつものように学校に行き、友達と遊び、勉強をした。そして父の一言を忘れていた。学校が終わり、車で家に帰る途中、地震が起きた。自分と祖母は車の中で何が起きたのか全く分からずパニックになっていた。その時外から声が聞こえた。

「地震だ、車から降りろ、転がるぞ。」

近所のおじいさんだった。揺れがすごく歩くのも大変なのに、近くまで来てくれたのだ。揺れが少しおさまり、おじいさんに頭をさげ急いで家に帰った。家はガラスが割れ、悲惨な状態だったのを生々しく覚えている。何とか家に入り、食べ物を持って車に入った。流石に家にいるのは危険で、何も考えられなくなっていた。そこに母が帰って来た。

何もできないまま、しばらくして夜が来た。光もなく真っ暗だった。だが近所の人たちが食べ物を持ってきてくれた。全ての人が大変な中なのにとってもありがたかったと今ではそう思う。その日は車で寝ることになった。車のテレビで津波を知った。そして父の一言とその日、父は女川に居ることを思い出した。テレビに映っているのは女川の海だ。その時自分の目から急に涙がこぼれた。頭が真っ白になり、そのまま寝てしまった。

次の日、ガソリンを買いに行った。ほぼ半日ならんでいたが、五台ほど前で売り切れになってしまった。しかし、前の方にならんでいた知り合いの人がタンクでガソリンを買って一つゆずってくれた。母はとても感謝していた。ならんでいる間、父の携帯に何度も電話をかけるがつながらなかった。

震災から三日目、公民館に給水をしに行った。公民館には多くの人が避難していた。そこでおにぎりや豚汁をいただいた。ゆつくりとかみしめていた時、誰かが後ろに立っていた。母と祖母は涙を流していた。

「ただいま。」

それは父の声だった。笑顔だった。自分たちは声がでず、出るのは涙だけだった。

これは後から父に聞いた話だが、津波がくる前、丘に逃げ、津波にはのまれずにすんだそう。波が引いた後すぐに家へ帰るため歩き出したそう。周りには多くの死体が転がっていたが、進みつづける人には自転車を出していただき、ある人には甘いチョコレートをいただき、消防車に乗せてもらったりしたそう。父は最後にこう言った。

「多くの優しさに出会った。」

地震が起き、パニックに全員がなったことだと思う。だがしかし、その中でも他の人のためにという人間の本当のやさしさが多く伝わり、優しさの大切さがよく分かった。

父の話聞き、苦しい中で人間からでる優しさは偽りでなく本当の優しさだと思い自分が本当の優しさを持てる人間となれるよう、日々の生活や、人に対する態度を見返してみようと思いました。

今ある「命」は、もしかしたら偶然いただいたものかもしれない。その偶然に感謝で現実になんか生活すべきなのだと思う。自分にできることを人のために生かすような生き方をめざしてみたい。